夢想王国物語

midnight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢想王国物語

【Ｎコード】
Ｎ２０３３ＢＡ

【作者名】
ｍｉｄｎｉｇｈｔ

【あらすじ】
王女が逃げ出した！その知らせを受けた准将レオは、ひょんな事が原因でハイドラ王国王女シャネラと出会う事になる。しかし二人の許されない関係が続いて行く中、シャネラに一刻を争う大きな問題が発生する。レオはその問題を解決する為に旅に出る事になるのだが、彼は本当に王女を救うことができるのだろうか。

プロローグ（前書き）

この作品はオリジナルです。
万が一登場人物及び設定、地名などが他作品と重なる場合がありましても、それは単なる偶然であり、故意によるものではありません。

あまり上手く無い文ですが、温かい目で見て頂けると光栄です。

※私用が無い限り、多分毎日更新します。

プロローグ

「それでは王女様、しばらくした後にまた御迎えに上がりますので」
朱色の夕陽を背に受け、無精髭を生やした中年の男は軍服の襟を正してから一礼した。
胸元には数々の栄光を数え上げた勲章が煌めいている。
彼の双眸からは、実力でこの地位まで上り詰めた人間の覇気が感じられた。

一方で男の正面の椅子に腰かける美姫は、男の声を聞いてどこか気に食わなさそうにしながらも、渋々と受け入れるような苦笑いをして「大人しくしていろ、というのでしょう？」と静かに返した。
ぶっきらぼうな言い方に男はしばし沈黙したが、誤魔化す様な笑いをして小さく首肯した。

「姫様の安全を考えてのことでございます。　特に今日のような日にはどのような者がいるか分かりませんし」
「詭弁だわ。　私がまた自分勝手に行動すると面倒なのでしょう」
王女はまるで人を侮蔑するかのような眼をしながら微笑を浮かべた。
「またそのような事を……。　しかしシズク様もいらっしゃらない今、御一人で行動されるのは正直危険極まりないのです。　ですから———」
「いつまでもうるさいわね。　用があるならさっさとお行きなさい」
彼女は空に舞う小さな虫を追い払うかのように手でしっし、と払い

のけた。

この国の将軍の一人でもある彼は、今日とあろう日にどうしても用があって王女の傍を離れなければならないのだが、いつまでもくどくどと忠告することにいつしか王女は苛立ちを覚えていた。

邪魔者扱いされた男は決まりが悪そうに喉を鳴らした後、「すぐに迎えをよこします」とだけ言い残し、さっさと王女の私室を出て行ってしまった。

――☆――☆――☆――☆――

外は今日と言う日にも関わらずしんとしていて、男が硬い床をした回廊を歩み去っていく軍靴の音が反響していた。

王女はしばらくそのまま席に腰掛けて茶を嗜んでいた。

しかし男の靴の音がしなくなるや否や、一国の王女とは思えない速さで自室のクローゼットに走った。

クローゼットには綺麗なドレスや優雅な着物が召使いによって並べられていた。　その中で、王女は服と服の間にこっそりと隠してあったローブに袖を通した。

見た目はまるで貧しい一般庶民のようで、一旦フードを被れば王女とは分からないだろう。

「ごめんなさいね」

ぽつりと誰もいない私室に向かって言い残し、ベッドの上にあらか

じめ用意しておいた国軍兵士の軍服を羽織って、彼女は誰にも気付かれずにこっそりと部屋を出た。

男はすぐに迎えをよこすと言っていたが、一階からここに上がってくるまでには少なくとも2分はかかる。　それに一般兵士を装えば怪しく見えるはずが無い。
日々常に誰かに束縛されている王女からすれば、無防備なその2分というのはチャンス以外の何物でも無い。

こうして、多くの人を巻き込むことになる王女の失踪が始まったのである。

01（前書き）

章や題名の関係で文字数が大幅に増減することがあります。　ご了承ください。

01

街は賑わいを見せていた。
それはまるで凱旋パレードにも匹敵する様な盛り上がりであり、晴れた夜空には大きな色取り取りの花火が絶えず上がっている。
城下町の通りでは様々な屋台が隙間なく立ち並び、店の者の掛け声と共に響くドンドンという重い音とまばゆい光が遠い夜空を彩っていた。
その色は青や黄色、緑や赤など非常にカラフルでありその火の花が空で咲く度に地上をその色で照らす。

今日はこの国、ハイドラ王国にとって記念すべき日であり、この日を迎え現国王在位５０年に値する。
そしてそれを祝福する祭りが城下町及び王都全体で行われていた。
大通りや円形の大闘技場周辺などは様々な大きさの屋台で埋め尽くされ、遠路はるばる今夜限りの盛大な祭りの為に王都を訪れる者も少なくは無かった。

そんな人ごみの中、人々の中をあても無くふらつく自分の前に、２０歳くらいの男が前方より歩み寄ってきた。
（茶色の髪に、背が高くて形相が険しいあの男は…）
「よっ！　また会ったな？」
外見とは離れ、馴れ馴れしく笑いながら歩み寄って来たのは親友、

フェンクスという男である。
そして何故語尾が疑問形なのかは不明だが。
端整な顔が雰囲気的に怖そうなのに加えて彼はやや短髪で、その髪を立てているというどう見ても不良にしか見えない男であるが、中身は外見と似合わず義理堅くて優しい一面を持つ。

「フェンクス、お前こそ非番なのか？」
「おうよ！　何せ将官の誰かさんが上手い事お上（かみ）に言って休暇を取った、と聞いてな、俺も同じようにさせてもらっただけだ」

ちなみに『将官の誰かさん』とは自分、レオのことを指す。
今日は祝賀祭だけあって特に王城の貴賓席が埋まるので、准将であるレオはその警護、そして式の参加者として普通は城に居座らなければならないのだが、そこは上に上手く融通を利かせて庶民の娯楽を共感させてもらっている。
しかし何を言ってもフェンクスも同じハイドラ王国の軍人で中佐。流石に二人もの高官が不在ではマズイのではないか？
レオがそれを訊こうとした時、彼が察して白い歯を見せながら先に言った。
「なぁに、本来非番だった部下を呼び出して俺の代わりに仕事させているから大丈夫だ」
（お前は鬼か！）
可哀想に。　折角楽しみに待っていた今日と云う日を、不甲斐ない

馬鹿のせいで台無しにされてしまうとは。
親子で花火を見に行く予定のあった彼の部下達に憐情を――

「あ、それよりもお前聞いたか？」

あ、話題を変えた。
上手く自分の権力濫用を誤魔化そうたってそうはいかないからなっ
……と思いつつ、フェンクスの表情が少し強張っていて、今は冗談
が通じそうな顔では無い。

「…って何の事？」

レオがまるでとぼけるかのようにぼんやりした表情を向けると、彼
は懐から一枚のメモ用紙を取り出した。

「近衛師団も出動しての極秘任務だレオ。　…本題から言うとだな、
王女様が城下町に出かけたきり帰って来ない……」
「何それ」

レオはあんぐりとした。
それを見たフェンクスも呆れ顔になっていた。

「…お前なぁ、王女様に何かあったらどうするんだよ！　今頃変な
奴に連れ去られているかも知れないんだぞ！」
「でも王女には護衛が付くだろう？　それにあのメイド長のシズク
もいるんだから」

この国の王女シャネラには多くの付き人がいる。
その中でも特に彼女にとって口うるさい世話役のメイド長、シズク
という女性が王女と肌身離さず付きっきりでいるはずなのに、はぐ

れてしまうと云う事は天と地がひっくりかえらない限りまず起こらないだろう。

「…実はシズク様は数日前に体調を崩されて休暇中だそうだ。　それに王女様は逃走がお上手だからな」

「要はシズク様がいないせいで、この人ごみの中で上手く逃げられたわけだな」

「そう！　だから俺達も巻き込まれたっつーわけ」

レオは耐えきれず愚痴の代わりにため息を漏らした。

「…ま、そのうち憲兵が見つけるでしょ」

「もし王女様が怪しい奴に絡まれてたらどうする！　襲われたりしていたらもう祭りどころじゃないぞ！？」

フェンクスは人ごみを気にせず叫んだ。

「馬鹿、お前はオーバーなんだよ」

全く、コイツは考える事が全て大袈裟で困る。
王女が今どうしているかだなんて知らないものは知らないし、それ以上どう反応していいか分からない。
それに、何故極秘任務なのかが分からない。　公に捜索命令を発表すれば早い話を――

「もっとさ、『そ、それは大変だ！』とか『よし、俺が絶対に王女様を守って見せる！！』とかいうリアクションはできねえのかよ？」

フェンクスは大袈裟に人ごみの中で両手を大きく広げて声を張り上げた。

が、その時、

「きゃっ」

短くて高い声が響いた。

前方から顔を隠すようにしたローブ姿の女性が歩いて来ていたのだが、フェンクスがあまりにも大きく動作したせいで、女性をわずかに腕で突き飛ばしてしまったのだ。

そのせいで驚いた彼女はバランスを崩し、バサッという音と共に尻もちをついてしまった。
同時に、顔を覆っていたフードの部分が取れて、金色の長い髪が女性の片目を隠した。

華奢な彼女は長い髪をほぼ真ん中で分けており、髪がかかった耳には外見に釣り合わないほど綺麗な耳飾りをしていた。
見た目では、よほどの貧乏人でも無ければ変な宗派の者でもなさそうだ。

しかしこれが市民に変装した王女…というわけでもなさそうだった。
なぜなら、王女の髪色はレオと同じ茶色と噂で聞いているからだ。

「ったぁ……」
「あー、すまん。　非常に申し訳ない」

フェンクスは素早く振り返って頭を下げると、尻もちをついてしま

い、痛そうにする女性に手を差し出した。
しかしフェンクスの心遣いとは裏に、女性は彼を睨み、そしてどこか一瞬怯えたような表情をすると彼の差し出した腕を振り払った。
そしてサッと立ち上がって、再び服で顔を隠しながら無言でその場を去った。

「あのぉ……。」
「ほら見ろ、言わんこっちゃない…」
全てを無言で見ていたレオが目を細めて言うと、フェンクスはしまりが悪そうに片手で頭をくしゃくしゃと掻いた。
この様子だと彼もかなり落ち込んでいる事であろう。
フェンクスは男にとやかく言われても馬の耳に念仏な男。　しかしタイプの女性から嫌われると、モロにショックを受けるのが彼の特徴なのだ。
「で、さっきから憲兵達が慌ただしくしているのはそれが原因か？」
レオが話の流れを変えてやると、フェンクスは喉を鳴らして声を通り易くしてから振り向いた。
「…ああ。　そうだよ。　おかげ様で祭りもクソもねえよ」
どうも先ほどから憲兵が走り回っている。彼らも王都の見周りで色々と忙しいだろうが、自分達の横を通り過ぎても気付かない。
普段は軍服に身を包んでいるので、肩章と胸元の称号を見た途端彼らは敬礼するのだが、今日は私服なので一般人にしか見えないら

しい。
最も、こちらの存在を知っていたとしても彼らは王女捜索を優先して無視するであろうが。
「まあそれはいいが、何故に軍部は公(おおやけ)の捜索命令を下さない？」
レオの無頓着な質問に対し、フェンクスは重いため息をついて彼の肩に片手を乗せた。
何か不満を言いたげな雰囲気を醸し出している。
「…もしそれがあの親馬鹿国王に知られてみろ。即刻首吊り台とロープが目の前に出されるだろうよ」
なるほど、王女の父は現国王に当たる。
しかも国王は親馬鹿で有名だ。
きっと自分の子に何かあれば国王の怒りは大爆発を起こし、その矛先が自分達に向けられかねない。
　だから極秘任務なのだろう。
「それに今回の任務は王女様を連れ戻すだけだ。　あくまで失踪したわけじゃない」
フェンクスが俺の肩をポンポンと叩きながら、『あくまで』と強調したのには何か理由があると思う。
　そもそも軍人である事に加え、彼にも捜索依頼が来たと云う事は、自分も後で『知りませんでした』では済まされない、ということ。
その上で命令を無視すれば確実に上官命令に背くこととなる。
「…で、手伝えと？」

がしっと手を握るフェンクスを見て、レオは怪訝な眼をしながら訊いた。

「勿論タダ働きじゃねぇ。　もし無事に王女様を連れ戻せたら給料は3倍――」

「了解したッ。　俺も全力で捜索させてもらう」

「……え、あ…おぅ」

レオは目にも止まらぬ勢いでフェンクスの腕をがっしりと握った。フェンクス自身、レオがあまりにも早く喰い付き過ぎてどこかきょとんとしていた。

まるで水も食料も無しで何日も砂漠を歩き続け、生死の境を彷徨って偶然オアシスを見つけた旅人のような顔をしている。

だが疑問が残る。

王女程の位となれば綺麗なドレスを身に纏い、すごく派手な格好をするので一目瞭然のはずなのだが。

ましてや、襤褸(ぼろ)やそれと同じような質素な服を着るほど王家のプライドは堕ちていないはず。

「でも今まで歩いて来たが、それらしい格好をした奴は見て無いな…」

「…、あ、それなら」

眉を顰めて考え込むレオに反応し、フェンクスは何やら思いついた

顔をして、先ほど懐から取り出した紙を再び広げた

「確か特徴が書かれている。
ええっと、…身長は１７０センチくらいで金色の髪をし、黒のブーツをはいている。
そして耳にはルビーとサファイアの散りばめられた王家の耳飾りを――」

（…嫌な予感…）

夜を彩る花火の明りと屋台の光しか無いのであまりよくは分からなかったが、先ほどの女性も何だかそれらしい物をしていた。

しかも恐ろしいほど条件が当てはまる。　髪の色と云い身長と云い、紙面上に書かれたものとそっくりだ。
とは言っても偶然、他人の空似ということもあり得る。　噂では彼女の髪色は茶色のはずなのだから。
しかし、王族は貴族中の貴族であり一般庶民はおろか、相当な位を有していない限り面会も許されはしない。
だから、ここにいる者ら誰もが本当の王女の容姿を目の当たりにした事が無いのだ。

「…た、たまたまだろう？」

恐ろしくなって訊き返したが、フェンクスは無表情で固まったまま口元さえ動く気配が無い。

01（後書き）

長々と読んでくださってありがとうございます。

誤字脱字含め、どのような感想でもお待ちしております。

02

レオはじれったくなって彼から紙を取り上げて実際に目を通してみると、そこには実に衝撃的な事実が載せられていた。

何と王女は自分が王族だと気付かれない為に、紺色のマントかローブのような姿で行動していたとのこと。　実際に王城兵士の者が目撃したそうだ。

（うわっ、間違い無い！）

「…おいフェンクス！さっきの人を追うぞ……って――」

レオは焦燥に駆られながら紙面から目を離したが、残念なことに彼はまだ気持ちが整理しきれない様子で、どうも動揺しているように見える。　もしあれが一国の王女ならば、彼は王女に暴行を加えたも同然と扱われるからだろう。

まあ、気が動転するのも無理は無い。

きっと今フェンクスの脳裏には、先ほど自分が口にした首吊り台と太いロープが想起されていることだろう。

「じ、じゃあ俺は行くからなっ」

王女であろう人物が向かった方向にレオが駆けだして人々を避けていく中、フェンクスは蒼白な顔色をしながら、人の行き来する大通

りの真ん中に立ち尽くしていたのである。

――☆――☆――☆――☆――

あれは本当に王女なのか？

そんな疑問が微かに脳裏をよぎっていた。

見た目の条件こそは当てはまるが、王族としての矜持（プライド）のある王女がそのような貧相な格好をするとは思えない。

それに先ほどの女性はブーツなど履いてはいなかった。

（じゃあ一体あれは――）

大通りは十字型に幾重にも分かれ、碁盤の目のような造りをしていた。

しかも一寸先には見知らぬ者の顔があり、とてもではないが巨大なこの迷路から人一人を見つけ出すのは困難を極めた。

レオは十字路の真ん中で前後左右を見渡した。

だが人ごみの奥に見えるのは、男共が寄ってたかる酒屋であったり、話し合いをして互いが横に首を振り、再び散開する近衛（このえし）師団兵士達。

街人の中には髪を金に染めている者もいれば、身長が紙面上に書

かれていたのと同じくらいの女性だっている。
レオは苛立って眉を顰めた。
その時、彼は見覚えのある顔の男が辺りを不審にきょろきょろとしながら歩いてくるのを見かけた。
どうやら向こうはこちらの存在に気付いていないようで、それよりも男は辺りを随分警戒している。
何かを探していると見える。

レオが近寄って声をかけようとすると、男は急に逃げ出すかの様に早足になり、人ごみの奥に消えようとした。

「サニシルト！」

レオが人の中を割って入ってその男に声を掛けると、彼は不意を突かれた様子で一瞬肩を震わせた。

「レ、レオ君、こんなところで一体…」

サニシルトは途中言いかけた言葉を思い留まった様子で喉の奥に無理矢理押し込んだ。

彼はレオより身長が高くて、恐らく１８５センチ位もある痩身の持ち主だ。　加えて、真っすぐ伸びた黒髪がフレームの細いメガネの上端にかかっている。
そして片手には常に肌身離さず持ち歩いている分厚い辞書のような本が。

「そうか！　きっと僕の講義を受けに来てくれたんだね！」
「いや違う。　お前のような奴の言う変な宗教に俺は興味が無い」
やっぱり話しかけなければよかった…と後悔するレオに対し、サニシルトは右手中指でフレームを持ちあげてメガネのズレを直し、にやりと笑った。
そして咳払いをしてから辞書のような本を開き、嘆くような感情をもって読み上げた。
「…ああ、神は悲しんでおられる。しかしどのような者でも豊穣神ゼネ神を信じる事によって――」
辞書では無く、あの分厚いのはやはり聖書のようだ。
性格上、あまりうるさく熱弁されるとレオの場合その聖書を取り上げてしまうところなのだが、意外にもサニシルトは王女シャネラの専属国教教授であり、並み大抵ならぬ権限と地位を有している。
幼馴染でも雲泥の差であるのだ。
「…まあ講義はいいとして、何故レオ君がここに？　式展には出ないのかい？」
「ああ。　だがお前も何故に王城を出ている？　お前は王女様の――」
レオが訝しげに訊いた時、サニシルトは暗い顔をしてひどく落胆した様子になった。
「…知っているだろう？　王女様が行方不明なんだ」
「やっぱりか。　俺にも捜索命令が出ていてな、実はさっき王女様かもしれない人を見つけたんだ」

「シャネラ様を？」

サニシルトは意外にも声を潜めていた。
普通こう言えば、王女を思う大概の者は焦燥感に押されて声を荒げるものなのだが。

「うん。　西区大通りの方で」

「……そうか」

どうもサニシルトの反応が暗い。わずかな情報でも喜ぶような者が、すでに絶望を与えられたかのような表情を浮かべている。

「他に何かあったのか？」

サニシルトはしばらく無言のまま何もしゃべらなかった。
しかし覚悟を決めたのか、ぐっと息を呑み顔を上げてレオを見つめた。

「お終いなんだ。　……式展に御出席されないシャネラ様に疑心を抱かれた国王陛下が、大層お怒りになっている。
まだ失踪したわけじゃない、と伝えたんだけど、かなり苛立っているみたいだ」

「…いよいよまずくなってきたな」

確かに、これだけ大きな式展が催される日に王女とあろう者が出席していないとなれば、彼女（シャネラ）に関わった者らは逮捕では済まされないかもしれない。
サニシルトの表情は終始暗く、気重そうだった。

「…僕は殆ど街に出ないからここらのことはよく知らないんだけど

――」

サニシルトは言葉を発しながら己のマントのポケットから何やらきらびやかな物を取り出した。

紅(あか)い蓮に白い鷺の刻印……、王家の物だ。

「ウェストディラス区で落ちていたらしいんだけど、僕はそこがどこだか分からなくて…」

「ウェストディラス区だと！？」

レオが驚嘆して叫んだ時、サニシルトの手中で煌めく豪華な耳飾りがカシャッという硬い音を立てた。

同時に上空に花火が上がった。

その光は紅い蓮の刻印の部分を、より濃く血の色に染めた。

「ウェスト…ディラス区がどうかしたの？」

「まずいな、あの地区は王都の中でも最も治安が悪い。　それにあの辺には物騒な集団がゴロゴロいて、数日前にも多数の強盗殺人が起きている」

「そんなっ」

サニシルトは一歩後ずさって口元を震わせた。

中央軍司令部に所属するレオは、王都の治安や警護に当たっている為にどこが危険なのかは熟知しているのだが、一日を壁と人に囲まれた生活を送る彼女なら、容易にあの区域に足を踏み入れてしまっても不思議ではない。

それにウェストディラスは憲兵であっても自ら進んで行く事は滅多にない。

耳飾りは恐らく、追っ手から逃れる内に一部の金具が外れ、そのまま落としてしまったのだろうが。
あそこは憲兵からの追っ手を逃れるには、うってつけの区域だ。

「と、とにかく、僕も…」
「無理だ。お前は近衛師団をウェストディラス区に向けるように命令してくれ。
武器も持たない丸腰の奴がフラフラと行っても帰って来れなくなるだけだ」

サニシルトは驚き怯えた様子で固唾を呑むと、小さく頷いて耳飾りをレオに手渡し、そのまま急ぎ足で人ごみの中に消えた。

03

街は暗かった。

先ほどのような賑やかな雰囲気は消え失せ、小さな街灯が家々の間の脇に十メートル間隔で立っているくらい。

しかも怖いくらいの静寂に包まれていて、街灯の光源に巣を張っている太い蜘蛛が罠にかかる蛾を忙しげに貪っている。

石が敷き詰められた硬い地を歩いて行くと、足音に反応した太いネズミが建物の隙間から赤い眼でこちらを恨めしげに睨んでいた。

ここは一体どこなんだろう…

小声で呟いてみたが、静けさを極めた闇からは答えは返って来なかった。

近くには草むらと水たまりがあるのか、小虫の音色と蛙の低いグーという音が無気味に木霊(こだま)した。

いくら歩を進めても人が見つかる気配が全く無い。

最初は一般人や他の兵士らに見られることを嫌ってフードを被っていたが、今になって気持ちは逆転していた。

むしろ誰かに見つけてほしかった。

ついには明りも殆どなくなり、いつの間にか後方遠くの方で上がる花火が恋しくなっていた。

「…暗い…」

一寸先の暗闇を見つめてローブ姿の女性は背筋に悪寒を走らせた。
光は無く、ただ上空の丸い月がまるで怪物の目のように見えて来て、急に恐ろしくなった。
特に真っ暗闇の先で何かがピチョン、と跳ねれば、蛙や小動物の仕業だと分かっていても怖かった。

道中いくらか人には出会ったが、皆力無しげに壁に凭れかかりながら、大きなため息をついている痩せ細った亡霊のような人間だけだった。

中には死んでいるのではないか、と目を疑う者もいた。
そして死にかけている者らは遠くで上がっている花火を見つめながらじっと動かない。
墓場と言っても過言では無かった。

「……帰ろう」

少しでも自分を元気付ける為に独り言を少し大きめの声にしたが、それは逆効果をもたらした。

「良かったら道案内してやろうか？」

はっとして振り返れば、顔じゅう汚れ、体には大きな古傷を持った巨漢らが微笑を浮かべながらこちらを凝視していた。

しかも一人や二人では無い。

仲間とはぐれた草食動物を前にし、何週間も肉にありついていない肉食獣の如く、彼らはじりじりと近寄って来た。　そう、躊躇いが無いのだ。

「いいえ、結構だわ」

女性は肩をすくめながら強気になって返したが、そんな虚勢はすぐに見破られた。

「まあお堅くなるなよ、貴族さん」

（何故私の身分を…）

彼女は突然逃げ出したくなった。

　しかし後ろは足元も見えない闇に加え、正面は手に変な棍棒のような物を持った物騒な者達。

「なあに、怖がるこたぁないさ。　ま、あんたの片耳に付けている飾りをもらえば、俺はお前に何もしたりしない」

男達は怪しげに嗤った。

（そうか、こいつらはこの宝石で…）

逃げるにはこうするしか無かった。　しかしもう片方の耳飾りは最初から一部金具が外れていて、それをどこかに落としてしまってい

たのは知っていた。
今はさっさとここを抜けだし、自分を捜索している兵士に身柄を確保してもらう方が先決。
「わ、分かったわ。でもそのかわり私を一人にしなさい」
女は彼らが自分の間合いに入られないうちに交渉することにした。
「いいだろう」
髭面の男はさらに嗤った。
先頭の巨漢は鬼人を思わせる体躯をしており、とてもではないが彼女の腕力では敵(かな)いそうもない。
ローブ姿の女性は片方の耳にしか付いていない豪勢な耳飾りを外し、男らの前に放り投げた。
耳飾りは金具の部分が地の石に当たってカシャンと音を立てて煌めいた。
それを巨漢は満足そうに拾い上げ、込み上げる笑いを抑えきれずに顔に出した。
「…へっへ、確かに頂いた。　だがもう片方はどうした？」
「さあ。　追っ手から逃げる時に落としちゃったと思うわ」
顔を見合い、何やら怪しげな表情を見せる不良集団。
すると先ほど耳飾りを受け取って、にやにやする男は周りの男共に顎をくいっと動かし、彼らに何かを命令した。
それに反応し、近くにいた細身の男が卑猥な微笑をする。

「……いいんですかい？　俺は気が強い女専門なんですがね」
下品な笑いを浮かべながら、残りの男共は汚らしい服を脱いでこちらに歩み寄って来る。
「構わん。　好きなだけ調べ尽くしてやれ」
「ちょ、ルール違反じゃない！」
甲高い声を嘲笑うかのように、大男はがっはっはと馬鹿笑いした。
そして他人を虐げるような眼で女性を見て言い放つ。
「俺は約束を守った。　俺様はさっき『俺は何もしない』と言ったが、こいつらが何もしない、とは言っていない」
不良の集団は気味の悪い笑みを浮かべた。
「卑劣な…」
「あ？　今何か言ったか？」
男は額にしわを寄せると、手にしていた棍棒を持ちながら集団を分け入って来た。
「な、何もしないんでしょ！　この卑劣で卑猥極まりない馬鹿男！」
「気が変わった。　この俺様が直々にこの周辺のルールっていうものを教えてやろう」
女性は己の身の危険を感じて腰に潜めてあった短剣を抜いた。
しかし、数でも武器でも彼らの方が明らかに上手。

女性は逃げ出そうかと迷ったが、生憎考える時間は無く、男共が一人の女性に殺到した。

丸々太った者や痩せ細った者らが一斉に飛びかかろうとする中、彼女は手にした短剣を盾に身を守りながら暗闇の中に後退した。

今となってはこんな奴らを信用した自分が馬鹿馬鹿しくて仕方が無い。

すでに耳飾りは敵の手中だし、逃げ道は殆ど塞がれてしまっている。

もし上手く逃げたとしても帰り道が分からず、袋小路に追いやられるのが目に見えている。

「っそ、ちょこまかと逃げやがって！！」

ぶんぶんと棍棒を振りまわす男共を上手く寸分でかわし、当たりそうになれば短剣を向けて威嚇し、なるべく間合いに入られないようにするのが精一杯だった。

幼いころからの武術経験があるとは言え、大人数相手は今回が初めてだ。

「そら、もう一つの耳飾りを出せ。　そうしたら――」

「逃がす気も道案内する気もないくせにっ」

「……御名答」

男はフンッと鼻を鳴らすと彼女に躍りかかった。

女性はフードを取って視界を開き、跳躍すると共にその艶やかな金髪を虚空の風に靡かせた。

男の集団からは卑猥とも言えるような歓声が上がった。

「…ちなみに、私は本当にもう一つの耳飾りを持っていないわ」
「まだ強がる気か、お嬢さん。　あんたが素直に持ち物チェックさせてくれればそれまでなんだがな」
巨漢はわざと疲れた素振りを見せ、怠惰を丸出しにした。
「私は本当に持って無――」
その時だった。
後ろの方でカツン、と誰かが地を踏み締める音が聞こえた。
しかもそれはやけに響き、男共の注意を引いた。
「残念。　そちらのお嬢さんは本当に持ってないぜ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2033ba/

夢想王国物語

2012年1月6日00時45分発行